

黄埔軍校の創立

三石善吉

- 一 黄埔軍校概述
- 二 国民革命の思想
- 三 軍校創立への途
- 四 軍校への途

一 黄埔軍校概述

一九三七年一〇月、毛沢東はイギリス人記者バートラム〔J. M. Bertram〕との談話の中で、一九二四年から二七年までの第一次国共合作期に、「党代表制」と「政治部」をもつ「新しい制度の軍隊」が作られたが、実にこの軍隊こそ一九二七年以降の紅軍、八路軍の原型となったものであると語った。⁽¹⁾

しからば、この「新しい制度の軍隊」とは一体どのようなものなのか。バートラムとの会見からほぼ一年ののち、一九三八年一月、毛沢東は「戦争と戦略の問題」の中で、「わが党は一九二一年（中国共産党の成立）から一九二四年（国民党の第一回全国大会）までの三、四年間は、直接に戦争を準備し軍隊を組織することの重要性を理解してい

なかつた。⁽²⁾「当時は、中国における武装闘争の極度の重要性を理解せず、しんげんに戦争の準備と軍隊の組織をせず、軍事的な戦略と戦術の研究を重視しなかつた」。ところが「労働者階級と勤労大衆は鉄砲の力によらないかぎり、武装したブルジョア階級と地主にうち勝つことはできない」ということを教えてくれたのが、ほかならぬ孫文と蒋介石であつたと毛沢東はいう。いや、もっと正確に言えば、国民党を介して、ソ連からこのことを教えられたことになるが、ともあれ毛沢東は次のように率直にのべている。「だが、一九二四年、黄埔軍官学校に参与してから、我々は「軍事の重要性を理解するようになった」と。毛沢東が孫文の「戦争の事業」として、反清朝と反袁世凱の武力闘争とならんで、黄埔軍校の設立をあげているのは、以上の文脈からみて、極めて重大な意味をもつことが知られよう。バートラムに語つた「新しい制度の軍隊」は、孫文の作つた黄埔軍校から生まれたのであり、この黄埔軍校こそが、対立する共産党と国民党に、はかり知れない精神的、人的、物的遺産を残し、一方では紅軍に継承されてやがて人民中国を出現させ、他方では蒋介石の権力を支える「膨大な中央軍」を可能にしたのである。

黄埔軍校が創立される直前、孫文は西南軍閥といわれる広東軍、広西軍、雲南軍などに頼つて、一九二三年二月には宿敵陳炯明軍を広東から撃退し、ここに大元帥府を樹立して北方の北洋派軍閥と対峙した。孫文の依存したこの西南軍閥の実態について、たまたま一九二二年八月から広東に駐在武官として派遣されていた佐々木到一陸軍少佐が、日本軍人の目から、極めて生彩ある觀察文を残している。それは一言でいえば、腐敗墮落した前近代的な軍閥の姿で、佐々木をして「孫文もこんな軍隊を使わねばならぬ間は、革命は絶対に成功しないと思つた次第である⁽³⁾」と書かした。次に佐々木の伝えるいくつかのエピソードを紹介しよう。

一九二三年九月、陳炯明拳兵の報に接した孫文は、陳の本拠地惠州城攻囲を命じた。このときの孫文の軍隊の様子

は、まず軍事幕僚たちの行軍についていえば、軍服ならぬ思い思いの服装で、武器も双眼鏡も持たず、ある者は魔法瓶をさげ、ある者は日よけの洋傘をさし、ある者は扇子であおぎつつ戦場に向った。佐々木はこの行列を「商工会議所辺の戦地慰問団」のごとしとのべ、彼らに軍事規律も軍事知識も戦闘意欲も警戒心もないことに驚いていた。さて戦闘となると、惠州城をみおろす飛鴉嶺の陵線上に孫文以下全幕僚がずらりと立ち並び、敵に全身をさらしながら双眼鏡をひっぱりあつての敵状視察を行ない、敵の正確な砲弾が彼らの頭上に土砂の雨を降らせると、皆、くもの子を散らすように後方の凹地に逃げこんだ。さて孫文軍（広西軍が中心）の攻撃となると、主砲は一五センチのカノン砲（何と一八八八年製！）で、おどろくべきことに、孫文自身が一夕射撃距離の修正を命じ、軍事幕僚たちはそれをよそごとのように傍観していた。この広西軍の本営には「休息所」なるものがあり、丁度前線から戻ってきた参謀らしき者が、いきなり寝台に横になり、たて続けに四、五服のアヘンを吸って寝こんでしまった。つまり休息所とはアヘン吸飲所で、広西軍も雲南軍もアヘンを吸わせないと動きが悪いと佐々木は観察している。佐々木少佐は、孫文の革命軍がこのような所謂「客軍」、つまり「各省の落武者的落伍的失業的軍隊の寄せ集め」⁽⁴⁾の軍にすぎず、そこには精神的統一の欠如、不完全きわまりない装備、政府の軍に対する統制の欠如が支配的で、彼はこの軍を「雲助的客軍」と呼んでいた。「だが併し流石の孫中山も、是等の雲助的客軍には手を焼いて居た。そこで思い立ったのが革命軍の改造」、つまり黄埔軍校の設立であつたと佐々木はのべている。

黄埔軍校創立ののち、このような軍隊のあるものは淘汰され、あるものは革命精神旺盛な精鋭部隊に生まれ変わり、膨大な農民や労働者の支援を背景に、孫文が一四年かかつてできなかった全国の統一を（勿論この間に蒋介石の四・一二クーデターがあり、全国統一は国共合作のもとでなされたのではなく、蒋介石による全国統一も実は形ばかり

ではあったが、ともかく）たった二年間で完成するのである。

それではこの黄埔軍校とは一体どのような学校であったのか。その詳細な歴史は別にのべることもあろうので、ここでは極めて簡単にその輪郭を述べておくにとどめるが、以下のようなものである。⁽⁵⁾

これまでの行論で我々は黄埔軍校と呼びならわしてきたが、正式には中国々民党陸軍々官学校、広州市下流の黄埔島におかれたので黄埔陸軍々官学校、あるいは黄埔軍校と簡稱された。軍校設立の発端は一九二一年一月末、孫文がコミンテルンの使者マーリンから軍校の設立を助言されたことにはじまり、一九二三年春の廖仲愷・ヨッフエ熱海会谈で軍校設立の青写真ができ、二三年八月には蔣介石を訪ソ軍事視察に送り出した。国共合作のもとに挙行された国民党一全大会で軍校設立案が満場一致で可決され、各省代表に学生の紹介を依頼した。上海と広州に募集所、試験場を設け、二千人ほどの受験者の中から四七〇名を合格とした。軍校の設立期における組織は、党代表廖仲愷を頂点に、その下に校長の蔣介石、その下に政治部、教練部、教授部、管理部、軍需部、軍医部の六部をおいた。第一期生は一九二四年五月八日に入學し、一月二〇日に卒業した。卒業生は六二三名、この中には国民党では桂永清、胡宗南、冷欣、鄧文儀ら、共産党では蔣先雲、李之龍、徐向前、周士第ら、第三次国内戦（一九四六年～四九年）で捕虜になり大陸に住む杜聿明、李仙洲、曾擴情、黄維らがいた。黄埔本校は第七期の卒業後、一九三〇年一月二四日に閉鎖されるので、いわゆる黄埔期は一九二四年から一九三〇年までとなる。以下この七期までを表にすると以下のようになろう。

黄埔期の全七期とりわけ国共合作期（六期の入伍まで）における教育の特色は、通常の士官学校と同じく学科と術科の教育をさずけたほかに、政治教育を重視したことにある。軍校成立の特殊事情から、この期の教育は日本、ソ

期	入伍(入学)	進学	卒業	卒業式	卒業生数	備	考
1	1924. 5. 5		1924. 11. 30	1925. 5. 20	623	科に分れず	
2	1924. 8. 1		1925. 8. 21	1925. 9. 6	449	歩、工、砲、輜重、憲兵の5科	
3	1924. 12. 12	1925. 7. 1	1926. 1. 6	1926. 1. 17	1233		
4	1925. 9. 1	1926. 3. 8	1926. 9. 29	1926. 10. 4	2654		1926. 1. 12 中央軍事政治学校と改称
5	1926. 3.	1926. 9. 16		1927. 8. 15	2418		
6	1926. 10.	1927秋	1929. 2. 3	1929. 2. 24	718		南京3252人卒
7		1929. 1. 4	1930. 9. 26		666		1928. 5. 15 国民革命軍々官学校と改名 南京852人卒
					8861		

連、中国の軍事思想・軍事技術の特異なアマルガムであった。⁽⁶⁾

まず日本の影響は、軍校設立にたずなわった王柏齡、林振雄(ともに陸士第6期)らの高級軍官から鄧演達、沈応時(ともに保定第6期)ら中堅幹部に至るまで、多く日本の陸士とその影響の大きい保定軍校の卒業生であり、学科術科はもちろん「内務の羨」「陸軍刑法」に至るまで陸士のものを範としていたことである。ところがこの日本の影響は、主として技術面にとどまったようで、政治教育重視に象徴されるソ連赤軍の影響が、国民革命の思想と混然一体化して大きな力を持った。それは党代表制、政治部、政治訓練科目、小組会議(学生も教官も同志として互に批判できた細胞会議)といった制度とその制度を支える精神の継受によくあらわれている。設立当初における校長蔣介

石、党代表廖仲愷らの精神訓話では、民衆を愛し死をおそれぬ革命精神、反帝反軍閥の革命戦略、ソ連の革命への賛美が説かれ、主義のために敢然と死地におもむく国民革命の精神がたたきこまれた。三期生はその卒業直前、一九二六年一月の国民党二全大会に出席するため二五年末ごろから陸統と広州に結集してきた「学優資深之代表」に政治講演を依頼し、一期二期生よりもはるかに多彩な政治教育が可能になった。⁽¹⁾以上を直接間接のソ連の影響とすれば、第三の源泉として中国の伝統的な兵学の復活も看過できない。たとえば、一九二五年一月六日に公布された「革命軍連坐法」は、士官兵士の敵前逃亡には死をもってむくいることを規定しているが、これは明の戚繼光の『練兵実紀雑集』巻四からのひきうつしであり、また太平天国鎮圧の指導的人物曾国藩、胡林翼からの抜粋『増補曾胡治兵語録』(一九二四年一〇月)を編んで学生必読の書としているなどがこれである。しかし、この第一次国共合作期においては、国民革命の思想が、ソ連軍事顧問の大きな関与のもとに、日本と伝統中国の兵学を圧倒していたことは言うまでもないことである。

一九二七年の国共分裂以降、黄埔軍校は四大家族・国民党官僚資本とともに国民党政権を支える武力軍事力の中核となった。これを南京時代(一九二七～三七年)とすれば、日中戦争の拡大とともに後方に移動した成都時代(一九三七～四九年)、さらに台湾に移っての鳳山時代(一九五〇～現在)と分れる。他方、共産党は一九二七年八月一日の南昌蜂起以降、黄埔出身者を中核としつつ、独自の紅軍の体系と戦略―人民戦争―をのみ出していくのである。その意味で、黄埔軍校は中国の伝統的な「好人不当兵」の神話を打破し、反帝反封建を戦いぬいた国民革命・大革命期の輝ける象徴であった。

二 国民革命の思想

フランス革命はそれまでの戦争の性格を一変させた。「虜をつくって身代金を得る」「人取り遊び」、王の「遊戯」としての戦争は陰をひそめ、サンジエストの「怒りに燃えて」「休むことなく」自由の為に敵を攻撃する激烈な戦闘を生み出した。⁽⁸⁾多くの論者がフランス革命を近代的ナショナリズムの出発点として見るのは、そこに祖国愛と郷土愛の見事に結合した事例を見出すからであり、ナショナリズムが、B・クリックの言うように、何よりも「精神の神話」(a myth of the mind)であるなら、それはすぐれて人為的なもの所の産、「分割地農民」の「所有感の理想型態」⁽¹⁰⁾の発露、かつ、所有を脅かす異民族の抑圧、列強の侵略への抵抗として現象しよう。

国民戦争、国民革命と呼ばれるこの戦争のプロト・イメージは、一七九三年八月、国民公会の発布した次のような全国民動員令に象徴的にあらわれているように思われる。

現在からのち、そして敵が共和国の領土から駆逐されてしまふときまで、全フランス人は軍役の為に徴集されるものとする。青年たちは戦争に出て行くであろう。既婚者たちは武器を作り、糧食を輸送するであろう。婦人たちは天幕、軍服をこしらえ、病院で働らくであろう。子供たちは古麻布をほどこくであろう。老人たちは広場にゆき、戦士たちの勇気をもえあがらせ、国王たちに対する憎悪をあおりたて、共和国の統一を勧告するであろう。⁽¹¹⁾

軍隊はまた「民主主義の学校」とみなされた。将校は兵士によって選ばれた。新兵たちは政治教育を与えられた。その情熱の源泉は祖国を愛する市民としての熱情であり、そこには鉄の規律が支配した。⁽¹²⁾確かに、F・ハーツものべる

ように、主人と奴隷の間には眞の統一と連帯はありえず、平等は統一と自由とに欠くべからざるものであるが故に、自由・平等・博愛というフランス革命のスローガンは、国民的与望 *national aspirations* の本質的要素を要約しているものであつた。⁽¹³⁾ つまり国民戦争が可能になるためには、国家と人民が隔絶する専制政体ではなくて、フランスの共和制のように普通選挙制と義務兵役制に支えられ、ルソーのいうように国家と人民が同一視される⁽¹⁴⁾、そのような政府のあり方が前提となる。そして、ナショナルな意識がハーツのいうように「ヨリ人為的」⁽¹⁵⁾ (more artificial) であるとするなら、国家即人民の神話をいかにインドクトリネーションするかが關鍵とならう。

ところで孫文は辛亥革命（一九一一年）の成る以前、同盟会を東京で結成して（一九〇五年）のち、一九〇六年冬に「軍政府宣言」を發し、次のようにのべていた。

明代や太平天国のごとき前代の革命は、ただ、異民族の驅逐、漢民族の再興だけをおのが任とし、それ以外の変革を考えなかつた。今日と前代とは違い、我々は異民族の驅逐と中革の再興のほか、国体や民生をも人民とともに変革すべきである。その経緯は様々であろうが、要するに一貫せる精神は自由・平等・博愛にほかならない。前代は英雄による革命〔英雄革命〕であつたが、今日は国民による革命〔国民革命〕である。国民革命とは一国の人々がみな自由・平等・博愛の精神をもち、みな革命の責任を負うものであり、軍政府はその枢機にほかならない。⁽¹⁶⁾

ここに表明された「自由・平等・博愛」の精神にもとづく「国民革命」の理念は、孫文のものというよりむしろこの宣言文の筆者汪精衛自身の思想であることは、この時期の汪精衛の諸論文に徴して明らかである。

汪精衛の国民革命の理念 (national ideal) は、たしかに一九〇五年の日露戦争以後、後発のアジア諸国に芽ばえた

ナシヨナリズムの初源的な姿を示すものではあったが、結局、辛亥革命はそれが進急的プチブルデモクラットの「英雄革命」にすぎなかったことを証明した。汪精衛の国民革命の理念は、余りにも時期尚早であった。マイネツケの、植物的「文化国民」から「国民国家」へとというシェーマ⁽¹⁷⁾は、ここ中国においては、まだはるかこの課題であった。実は、中国における広汎なナシヨナルな意識は、一九一六年の袁世凱の復古的体制の崩壊ののち、文学革命（一九一七年から）、ロシア革命（一九一七年）、五四運動（一九一九年）を経て初めて明瞭な姿をとってくるのであり、こういった一連の「英雄的出来事」が階級方言の抑圧、国民経済の未成熟、封建思想の束縛という枠をはねのけ、市民・ブルジョアジーによる革命を準備したのである。このことは「新青年」の果した役割に明らかで、例えば文学革命が桐城派の古文を否定して白話を提唱し、デモクラシーとサイエンスを高唱し、魯迅の『狂人日記』などの諸作品を生み出したのは、H・コーンによれば、ドイツ、イタリーといったヨーロッパでの後進国のナシヨナリズムが何よりもまず学者、詩人、作家の文化運動として出発したという指摘⁽¹⁸⁾とあたかも一致する。古文の否定とは階級方言の打破、特権の文人教養とその担い手の否定、それに代る国語（つまり市民自身の言葉）の提示を意味し、これはまた、第一次大戦後飛躍的に発展した民族資本・ブルジョアジーの経済の地方割拠性克服の要求（単一市場圏形成の要求）にみあうものなのである。こうしたブルジョアジー・ミドルクラスの抬頭を背景として、一九二二年に陳独秀の「造国論」が出て、「一国の人すべてが責任をもつ」汪精衛の国民革命論をよみがえらせた。この復活は、もちろん、ロシア革命、コミンテルンの働きかけ、中国共産党の成立という一連のドラスティックな出来事の結果ではあったが、むしろ、中国人民の内なる力・国民たらんとする意志力の一つの表現なのであった。つまり、五四運動で起ち上った民衆をどのように組織するか、噴出したナシヨナルな意識をいかなる政治理念に向って溝条化していくのかという問題、すで

に否定された儒教的統一理念に代っていかなる国民的統合の理念を提示するのかという問題への、一つの解答なのであった。

中国の直面する植民地化の危機を国共合作・党内合作という「内、国民の意力に恃む」⁽¹⁹⁾方策として定式化したのはレーニンのテーゼを具体化したマリーリンであった。国民の「意力」を革命的ブルジョアジーの政党（国民党）に結集する国共党内合作案が、両党に様々な抵抗と危惧を残しつつも、一方ではマリーリンのコミンテルンを背景とした強権の発動と、他方では革命の父孫文のカリスマ的な権威とによって、合作は規定方針となって急速に準備が進められ、軍官学校の創立も、のちに詳述しようが、廖仲愷を中心に着々と進展させられていた。そして、この合作のイデオロギー、つまり国民革命なる理念の「創立」準備は、共産党とりわけ陳独秀によってなされた。いま、その経過を簡単に要約すれば次のようになる。

一九二二年六月、中国共産党は最初の対時局宣言（「第一次對於時局的主張」）を発し、いわゆる党外合作論を展開するが、それは、ブチブルの平和主義者、革命的民主主義者（国民党のこと）、農民、労働者、学生、兵士、警察、商人まで呼びかけの対象とする「多数の党派の連合」の「革命的な手段」によって、反動的な「官僚軍閥」を打倒しようとするものであった。そしてこの広汎な運動は「民主主義連合戦線」⁽²⁰⁾と呼ばれた。この時局宣言の直後、共産党はその二全大会決議（一九二二年七月）で、国民党との「一時的な同盟」による連合戦線を「民主主義革命運動」⁽²¹⁾と規定していた。しかもこのころ（二二年八月末）李大釗、陳独秀らは、孫文みずからの立ちあいのものと、「個人の資格」で国民党に加入しようとしていた。いまや最も緊要なことは、この合作の理念の提示であった。一九二二年九月二〇日、陳独秀の「造国論」⁽²²⁾はこのようなときに出現した。ここに改めて、かつての汪精衛の提唱した国民革命なる

理念が復活し、以後、合作期を貫ぬく最も中心的な国民理念 (national ideal) となるのである。この「造国論」の骨子は次のように要約できようか。「造国論」はまず、

今や英雄主義の時代、賢人政治の時代は終りを告げたと述べて汪精衛の軍政府宣言の認識を再確認し、大衆の要求を基盤にすえたプロレタリアート、ブルジョアジー「両階級連合」の「国民軍」を創出しなければならないと提案する。なぜなら、今や「真の中華民国」を樹立する「国民革命 national revolution」の時期が成熟している」からである。陳独秀にあっては、国民革命なる概念は国内的国際的な一切の圧迫を除去する権力奪取の革命過程としてとらえられている。つまり中国の自由独立をめざすブルジョワ革命の同義語として用いられている。ところでこの「造国論」において我々の注意をひく点は、ここに、マールリンが孫文に語った軍校設立という考えがまったく見られないという事実なのである。これは翌一九二三年四月にかかれた「どのように軍閥を打倒するか」²³⁾についても同様であり、国民革命論は展開されていても、軍校案はその萌芽すら見られない。この理由はのちにのべよう。ここでは陳の軍閥打倒の方法をきこう。それはまず「全国の各階級、各党派、各分野の諸勢力」を反軍閥（そしてこれを支援する帝国主義への反帝）の統一的な国民運動に結集する。その一つの具体策として「武装した農村の平民」の「大規模な地方自衛組織」と都市平民の「大規模の商工自衛組織」を「国民革命軍」の周囲に集め、統一的な国民運動を展開して軍閥を打倒するというものであった。

ところでこの時期の共産党は、軍事行動といえば直ちに孫文のたび重なる旧軍閥と結んだ武装蜂起を想起したよう
で、マールリンは孫文に単なる軍事行動の発動をいさめたし、同じ意味において、孫鐸も、共産党三全大会宣言（一九二三年六月）も、大衆的基盤なき軍事行動にまったく否定的であった。²⁴⁾それ故にこそ陳独秀の都市と農村の平民の武

装力を正規軍である国民革命軍と結合して考える視角は、郷土愛を祖国愛にまで高める卓抜な着想であった。赤軍創立期にトロッキーは革命の精神と革命の戦力をいかに結合するかという問題に直面し、党代表制(Commissar)・軍校の設立と全市民の武装化という解決策をみいだした。⁽²⁵⁾ところが陳独秀の理論には、党代表制と軍校設立の問題がすっぱりぬけ落ちてゐる。してみると、マーリンその他のコミンテルンの使者たちは、コミサール制や軍校のもつ意味を中国共産党の要人たちにまったく伝えなかつたのであろうか。

とまれ、孫文が広東に大元帥府を設立し、二三年四月には陳独秀を大本营宣伝委員会委員長に任命すると、陳独秀は譚平山、馮菊坡らとともに、かねての「造国論」の論旨を敷衍した、都市・農村の平民の武装化による国民革命の思想の宣伝に傾注する。たとえば二三年七月発行の『中国革命中の民団問題』なるパンフレットはほぼ次のように⁽²⁶⁾う。

外には中国を併呑しようとする列強、内には軍閥があり、無秩序は全国をおおっている。ここに王安石の保甲にならい、農村と都市に農団軍、商団軍、工団軍を創立させ、一方では農村や都市の治安を保ち、他方では真正の職業兵をつくって「国民革命の首領孫中山を援助」すると。また同年八月の『国民革命と工人』⁽²⁷⁾なるパンフレットでは次のようにいう。国民たるの資格は愛国心にある。国民革命はこの愛国心ある国民がみずからの「自由」のために、外なる列強と内なる北洋軍閥を打倒し民主立憲政治をうち樹てることである。

黄埔軍校の創立以前において、中国共産党機関誌『嚮導』は一言も軍校に言及しない。創立以後においてさえ、たとえば蔡和森が「商団事件の教訓」(一九二四年九月『嚮導』82期)の中で、革命状態がまだ成熟していないとき、つまり民衆の間の勢力がまだ成熟しないうちに、一部分の政権を握ったり、地方的な革命政府を樹てたりして、「全く、

いささかも好結果なき軍事行動に全力をそいでいる」のが孫中山である、と述べたように、黄埔軍校が設立され、反革命的な商団を粉砕したのちでさえ、これを孫文の旧来からの軍事的投機の延長とみる傾向が共産党にあった。当時の共産党は、毛沢東もいうように、軍事のもつ重要性にいささかも留意していなかったのである。しかし、この原由はコミンテルンの指導した国共合作路線そのものにひそんでいた。一九二六年三月二〇日の中山艦事件ののち、陳独秀が民衆の武装化という彼の持論を再び提起したとき、コミンテルンは、①武装した農民では北伐はおろか陳炯明を討伐することさえできない、②国民党の疑惑をひきおこす、③国民党に対する民衆の反抗を呼びおこす、という理由でこの提案を一蹴した。⁽²⁸⁾つまり、国民党との合作という至上命令を実行するために、コミンテルンは中国共産党が独自の軍事力を持つことを許さず、それ故に、共産党に対して軍校創立とその意義につき、何ら協議・教授しなかつたのではあるまいか。陳独秀の国民革命論のすぐれた点は、正規軍と市民・農民の武力とを結びつけた人民戦争の萌芽的発見にあり、これは承知のように、のち毛沢東によって完成されることになる。

三 軍校創立の諸階程

軍校創立案はすでに一九二一年二月マールリンに示唆されたが、陳炯明の反乱で根拠地を失なつた孫文は、しばし、この案を実行に移せなかつた。一九二三年二月、広州が回復されるとこの案は再び動き出す。その一つは同年八月の蒋介石のソ連派遣である。この間、すでにM・M・バラディーンを顧問にむかえた国民党は軍校創立を決定し、蒋介石がモスクワを離れる三日前の一九二三年一月二六日、第一〇回国民党臨時中央執行委員会で、訪ソ中の蒋介石を校長に擬していた。ついで国民党一大会（一九二四年一日二〇日～三〇日）中に軍校創立案が採択され、孫文

は蒋介石を陸軍々官学校準備委員会委員長に、王柏齡、鄧演達、沈心時、林振雄、俞飛鵬、張家瑞、宋采昌の七名を準備委員とした。⁽²⁹⁾

李済深の回想によれば、孫文は軍校の創立準備を廖仲愷と彼に一任した。そこで「私〔李済深〕は数人の幹部を黄埔軍校創立のために派遣した」⁽³⁰⁾。この幹部の中に鄧演達、嚴重、林伯渠、錢大鈞、陳誠がいた。国民党一大大会のうち、一九二四年二月六日、軍校創立の準備所が広州の長堤に設けられた。⁽³¹⁾三階建のビルで、二階は準備委員長（蒋介石）の寝室と応接間、三階にオフィスをおいた。二月八日に第一回の会議を行ない、一期生の入学する五月はじめまで、三二回の会議がもたれた。創立の仕事にたずさわったのは、準備委員七名と、顧祝同、陳継承、劉峙のほか、李済深が派遣した嚴重、錢大鈞、陳誠などであった。軍校の全体的なプランは廖仲愷がたてた。彼はさまざまな激務にもかかわらず、一日に何度も準備所に来ては全体の進捗を監督した。三カ月ほどのこの準備のなかで重要なものは、校舎の修理、教職員の採用、学生募集、一期生の教練計画、服装、テキストなどの様式とその購入であった。以下に王柏齡の回憶を中心にしていくつかの問題をとりあげ、軍校創立の模様を再現してみよう。トリビアルな問題が多いが、学校づくりというものは元来そういった事柄の積集なのである。

○学生募集 一大大会の最終日、廖仲愷は大会の全出席者に学生の紹介を依頼した。「国民党周刊」第九期（一九二四年二月二四日）には次のような「国民党軍官学校招生通告」が載っている。「各省代表の諸君に青年学生の紹介を請う。毎省一五人を定員とする。二月末日までに広州にて受け付ける。遅くとも三月二〇日までに。これを越えたものは採用しない。二月一五日以前に紹介する学生の姓名、本籍、年齢を本党の中執会に知らせてもらえれば、必要な旅費を中執会が遠近を斟酌して発給するの都合がよい」。正式な学生募集計画は二月八日にできあがった。それ

によれば、各省への割当、定員は次のようであつた。⁽³²⁾

総定員は三二四人。東三省、熱河、察哈爾から五〇人、直隸、山東、山西、陝西、河南、四川、湖南、湖北、安徽、江蘇、浙江、福建、広西、広東の一四省から各省一二人として合計一六八人、湘、粵、滇、豫、桂といった孫文を支える西南軍閥の各軍一五人として全七五人、本党の先烈遺族から二〇人、合計三二三名。なお一名不足するが、別に補欠を三〇〜五〇人、総計三五四人から三七四人を採ることとした。後の章で学生の募集状況については更に詳述するが、応募した学生の質が極めて高かったので、定員枠はかなり広げられた。

○校舎 広州市下流二〇kmほどの所にある黄埔島には、国民党軍政部長・程潜のひらいた講武学校がおかれていた。四棟から成る校舎は、すぐる陳炯明の反乱で砲撃を受け、屋根など大破していた。この修理は四月なかばまでかかった。なおこの黄埔島は光緒一三年（一八八七）張之洞が両広水師学堂を設けた由緒ある地で、民国になって海軍学校が置かれたところである。

○軍服 王柏齡、佐々木到一が回想しているように、日本軍の軍服にない佐々木の考案を加えたもの。王柏齡によるとこの軍服の特長は次のようだという。折り襟、うつむきやすく、首を後方に曲げやすい。ポケット、外側に四つ。ボタン、七つ。外皮帯、軍服の上から外ベルトをしめる。肩からかけるのはソ連式の輸入。脚絆、黄色の皮脚絆。軍服の色は黄緑色。帽子、はじめナポレオン式の帽子を考えたが孫文が賛成せず、前面が高くうしろが低いものに変えたと王柏齡は回想している。孫文と合影した校長蔣介石のよく見かける写真は如上の軍服軍帽に身をかためた姿と思われる。

○用具 ベッド、教室用・自習用の机椅子、掛布団、敷布団などは王柏齡がまず図をかき、寸法を入れ、試作品を

一つ作らせ、それから必要な数だけ発注した。食器、靴、帽子、文房具、事務用品なども皆そのような手続でそろえた。北京軍需学校第一期卒業生である俞飛鵬がこれらすべての渉外系を担当した。

○操典 六ヶ月の短期で実戦に役立つ幹部を養成する教科書はどこにもなかったので、王柏齡は苦心して戦術教程、兵器教程のテキストを作ったという。これは彼も卒業した陸士のものを翻訳して作ったものである。

○武器 広東の軍需産業はまだ幼稚で、戦争あるいは軍を最大の顧客として巨大な生長をとげていくことはなかった。その中でも石井兵工廠（広東兵工廠ともいう）は最大で、孫文は早くから（一九二三年一月）馬超俊⁽³³⁾をここに送りこんで兵工廠長とし広東軍政府下におくも、広東駐留の各軍閥が任意に徴発し、資金不足や技術の問題もあり、一日一五時間稼動して三五丁という生産力の低さであった。黄埔開学のとき、孫文は五百丁の歩兵銃（七九モーゼル銃）と四丁の機関銃を発注したが、広東駐留の軍閥の防害で間にあわず、馬超俊は兵工廠の護衛兵の銃をとりあげて軍校にまわしたという。王柏齡は、開校のとき銃は三〇丁しかなかったと述べているが、最近発見された一九二三年五月二日の蔣介石の廖仲愷宛書簡によると、すでに二三〇丁の銃を受けとっているが、まだ一五〇丁たらないとある。⁽³⁴⁾一九二三年五月五日に第一期生が入学しているから、入学当初、銃は全員にゆき渡らず、五月二五日になつてようやく不足分が届き全員に配布することができた。⁽³⁵⁾すこしのちのことになるが、ソ連軍事顧問キサンカのレポートによれば、広東兵工廠の弾薬生産量は一日に一・八万発、雲南軍の兵工廠は日本の村田銃用の弾丸を一日二万発生産した⁽³⁶⁾という。なお列強は中国の内乱を助長しないためと称して、一九一九年三月に日本が、一九二二年一月にバルフォアが対華武器輸出禁止を提唱したが、ドイツ、ソ連はこの協定に加入せず、列強もひそかに武器を軍閥に送るなどして、この協定は空文に等しかった。

○学校の組織 袁世凱以来の中国の伝統的な軍校組織とは全く違い、党代表の下に校長をおき、校長の下に政治、教授、訓練、管理、軍需、軍医の六部がおかれた。政治部は主義と革命思想の涵養といった革命精神教育を掌どり、各科の教官スタッフをもつ。訓練部は術科の教育を司どり、その下に総隊と分隊をおいた。この上三部とやらんで軍紀の維持、伝令、人事を司どる管理部、糧餉、被服、器材を供給する軍需部、衛生行政を司どる軍医部があった。

この組織の中にいくつかの注目すべき制度があった。王柏齡の説明によれば、①政治教育制度 これは資本主義諸国にはないもので、革命とは政治を改革することであるが故に政治について知らねばならぬからという。②党代表制 これはソ連赤軍のコミサール制の導入である。③副主任制 各部に副主任をおく。主任が少将であれば副主任は小佐とか大尉がなり、業務は主としてこの副主任が担当する。中国の伝統的な正副の制度がほぼ同等のものになることからすれば、これは全く異なった制度であったと王柏齡は回想している。④各部の分権制をしきつともトップに集中されるシステムをとった。中国の旧来の組織観ではこの集中性が欠如して勝手に独走するケースが多かったという。⑤細胞会議 王柏齡はこれを小組会議と呼んで「我々の靈魂」と絶賛している。黄埔軍校が日本陸士の圧倒的な影響を受けつつも、継承しなかった（と思われる）唯一のものは「打罵教育」（ビンタ教育）であったようだ。それはこの小組会議によくあらわれ、教官も学生も上級生下級生も同じ国民党の同志として平等対等であり、相互に批判することができた。この小組会議を通じて学生の思想を高め、革命精神を涵養し、そこから積極性をひき出すことができた。王柏齡は「我々革命軍が、一を以て十に当り、一を以て百に当ることができたのも、まさしくこの制度にあった」と述べている。

ともあれ軍校最初期の組織とスタッフを示すと次のようになろう。

軍校党代表 廖仲愷

校長 蔣介石中將

政治部主任 戴仁賢

副主任 張崧年

教官 汪精衛、胡漢民、卞元冲

教授部主任 王柏齡少將

副主任 葉劍英少校〔少佐〕

總教官 何應欽少將

教官 顧祝同、錢大鈞、劉峙、胡樹森、陳繼承、嚴重、王俊、陸福廷（以上八名中校〔中佐〕）

文素承、梁広謙（以上二名少校）

訓練部主任 李濟深少將

副主任 鄧演達中校

總隊長 沈応時少校

管理部主任 林振雄上校

副主任 吳子泰上尉〔大尉〕

軍需部主任 周駿彦上校〔大佐〕

副主任 俞飛鵬少校

軍医部主任 宋榮昌上校

校長弁公庁西文秘書 王登雲中校

中文秘書 張家瑞少校

特別官佐 陳誠上尉、簡作楨上尉など。

(注)(1) 王柏齡は政治部副主任を周恩来としているが、周の帰国は二四年七月、代理主任の邵元冲が孫とともに北上した二四年十一月以後は主任の職不在のため代理主任の周が実質的に主任であった。『国軍政工史稿』(上)は周の政治部主任正式就任を一九二五年四月としている(一〇二頁)。

(2) この表は毛思誠『民国十五年以前之蒋介石先生』、『陸軍々官学校史』などによる。蔣の校長就任は五月三日、廖の党代表就任は五月九日、各部主任副主任は五月十二日までには就任している。

四 軍校への途

国民党一全大会が「連ソ、容共、扶助農工」の三大政策を決定して閉会されると、大会で決議された諸事項が実行に移されはじめた。黄埔軍校に関していえば、一九二三年二月六日に準備所が設けられ、軍校受験生の旅費が定められた。八日には各省の募集定員、総定員が決定された。「軍官学校章程」、「陸軍々官学校考選学生簡章」(全十条よりなる)も成立して⁽³⁷⁾軍校の目的も明確に規定された。

その簡章の第一条は「本校は軍隊に徹底した改良と進歩をもたらすべく、意志と熱情があり養成にたえうる全国の青年に軍事の學術を研鑽する機会を与え、かつ三民主義を教授して良好な主義ある軍人を養成し、党軍の下級幹部を為らんと希望する」とのべて軍校設立の目的は下級幹部の養成にあることを明らかにした。二条から十条の大略は、

修学期間は六ヶ月（第二条）、受験資格は一八歳から二五歳の高等学校卒業の国民党員であること（第三条）、受験科目は国文と数学（第五条）、上海で応募した者はそこで第一次試験を受けること（第七条）、合格者には広州までの旅費を支給する（第八条）、合格して入学した者には服装、飲膳、書籍、文具、月給を支給する（第九条）、卒業後見習士官を終えて歩兵少尉の待遇を受ける（第十条）というものである。この「陸軍々官学校考選学生簡章」は一九二四年二月二〇日の中央執行委員会を通過し、この簡章の規定にもとづいて学生が選抜された。なお学生の広州までの旅費は、①江蘇、浙江から広州に来たもの、二〇元、②安徽、江西、湖北、山東から上海を経て広州に来た者、三〇元、③湖南、河南、山西、陝西などから上海を経て広州に来た者、四〇元と決められた。⁽³⁸⁾

準備委員長の蔣介石が、アキモヴァによれば、経費不足に「ヒステリー」⁽³⁹⁾をおこして故郷に帰ってしまうのが二月二一日のことで、王柏齡の回想によれば、この日、蔣介石は沈応時と王登雲に「私はこれから上海に帰る、私の手紙がついたらすぐ発ってくれ」といいのこして広州を去ってしまう。蔣介石の手紙を受けとった王柏齡と王登雲が上海に向かわんとしているとき、廖仲愷が急ぎかけつけ、「君達が行ってしまうと学校はおしまいだ、革命の前途も絶望的だ、蔣先生の困難は我々が何とか排除しよう、君たちは何があっても行ってはならぬ」、「革命は決して順風満帆という訳にはいかない、はかり知れないほどの多くの艱難を力をつくして克服して始めて成功できるのだ」とさとした。

蔣介石が去ったあとは、この廖仲愷が中執委、工人部長という激務にもかかわらず準備委員の委員長をつとめ、蔣介石に急ぎ戻るよう数度に亘って打電するが、彼はほとんど準備が整う四月二一日まで広州に戻らないのである。だから、むしろ廖仲愷が蔣介石の帰粵をうながす電報⁽⁴⁰⁾をみると、この間の軍校の準備の進捗の過程がわかるほどである。

一九二四年二月二五日、介石が去ったのは西巖が資金を渡さなかったからだというが……（胡漢民あての電報）。

同 二月二五日、党の事業が兄によって敗れんとす！上海に集まった軍官学生に試験をし、終わらすぐ戻られたし。(蔣介石あて)。

同 三月七日、軍校の勢、騎虎と成る(胡漢民あて)。

同 三月一〇日、広州で受験する軍官と学生二百余人は、もう一ヶ月間も待ち続けて旅費を使い果し、詰問状がここに続々と届いているがどうしようもない。そこで今月の二四日に軍官の、二七日に学生の試験を行なうことにした。急ぎ上海で試験を終えて、即刻戻られたし。遠来の受験者にそむき党の名譽を傷つけるなかれ(蔣介石あて)。

確かに「軍校の勢、騎虎と成る」状況であった。三月一〇日に二百人ほどであった受験者は以後ますます増え、二〇日のメ切までには千二百人にもふくれ上った。⁽⁴⁾一全大会に出席して故郷に戻った各省の代表者たちが自信をもって推薦してきた学生たちである。年齢はほとんどが二一、二歳前後で、彼らは五四運動の洗礼を何らかの形で受け、はるか孫文の革命運動を知り、内に軍閥の跋扈、外に列強の祖国侵略を目撃していた。彼らは激しい救国の念にもえ、ある者は大学の学生々活を放棄してペンの代りに剣をとろうとした。ある者は、小学校の教師の職をなげうち、ただ紹介者の紹介状とわずかばかりのお金を懐中にして故郷を出た。中国の古くからの諺「好人不当兵、好鉄不打釘」にとらわれた父母、親戚は、兵士になるため広州にいくときいて仰天して悲しんだ。

次に掲げるのは、各省代表が推薦してきた学生の名簿である。湖南五九人、江西五四人、安徽二六人、福建一五人、山東一四人、広西一三人、湖北九人、江蘇五人、漢口特別区四人、高師校長三人、西藏三人、蒙古三人、ビルマ一人、計二一人となっている。姓名の右側に傍線のある者は第一期合格者で、二八人、傍線に①があるのは講武学校から編入されて第一期生となった者で、八人、傍線に②、③などとある者は二期、三期に合格した者である。

本會第一次送考軍官名冊⁽⁴²⁾

○廣東代表譚平山介紹 洪劍雄

○湖北代表居正介紹 劉赤忱、祭斯鐸、方振周、張滌氛、祁國義、張煒、查伯秦、華望

○湖北代表夏風介紹 鄔興點

○湖南代表陳嘉祐介紹 李衡、何飛翰、于磊、霍揆彰、李正義、陳道賢、万成注、李沢民、方尚武

○湖南代表林祖涵介紹 王忞澍、石輝先、楊名錫、余鏞、蔣肇周、趙照、歐陽亮、夏秉三、黃立存、单先聰、金修

○、丁邦正、姜米蒙、李焜、魯敬安、寧鳴猷、戴青山

○湖南代表袁達時介紹 李振唐、蔣先雲、伍文生、李焜、李漢藩、魯易、羅漢、李仁、趙自選、趙自誠、張際喜、唐

朝美、○水、譚影竹、戴曉雲

○江西代表彭素民介紹 帥倫、張禪林、何基、洪宏義、徐欽才、黃在環、郭庸、胡魁梧、徐情初、張振東、周有銘、

鄒繼麟、桂永清、羅群、鐘遠勉、歐陽傑、鄧子超

○江西代表徐蘇中介紹 易毅、侯克聖、劉人傑、劉天鐸、郭礼伯、丁抄屏、賴天理、賴天璣、李錫鈞、郭家楫

○江西代表周道膺介紹 鄭光、鄧志美、余伯瑜、鄧陽谷、胡勉修、羅群、陳國桂、俞煥義、吳碩輔、李士奇、程孝懋、

英恢、閔望、程肇清、程浩、朱雄奇、徐炳堯

○江西代表蕭炳章介紹 羅張、李強、李向榮

○江西代表胡謙介紹 胡倍、胡琨、楊森、何培、呂琨、李西平、陳大磨

○山東代表丁惟汾介紹 李玉堂、冷相佑、劉純一、刁步雲、張汝昭、邸元文、張大化、王培礼、劉麟猷、王用章、延

庶風、滿玉剛、拜学礼、陝福

○福建代表丁超五介紹 曾則民、苑仲堯、何良士、黃鐘乾

○福建代表許卓然介紹 黃德聚、王湛、陳聯輝、陳天文、周啓芳、林祥斌、楊誰璜、李俊卿、李良榮、李達材、胡翔

○安徽代表張秋白介紹 苑天平、章炳泉、張震寰、吳紹謀、曹永齊、章季康、沈叔林、祖茂衡、蔡炳發、柳琛、李銑

○安徽代表白文蔚介紹 何丙發、程汝繼、苑天平、薛卓漢、黃世英、吳鋌、孫以宗、

○安徽代表楊虎介紹 朱棟英、孫子楊、鄭友綱

○巴西代表劉幅介紹 徐振敏、羅奇、^①羅照、楊沃霖、施定中、施鵬飛、施元凱、陳文宝、鄭雄威、盤安、武威、甘杰

彬

○江蘇代表狄侃介紹 王則黃、伏琴堂

○江蘇代表劉雲昭介紹 顧昭、熊成鰲、葉図本

○安徽代表譚惟洋介紹 花盛雲

○安徽代表凌毅介紹 何性惠、李俊武、吳瑞、吳柏笙

○廣州特別区代表方瑞麟介紹 方寿謙

○蒙古代表恩克巴図介紹 李雲鵬、王克猷、塔宝符

○暹羅代表蕭仏成介紹 王鎮亞

○巴西代表蘇無涯介紹 黎工能

○高師校長鄒魯介紹 鄒愛孚、廖祖蔭、鄒鈞

黃埔軍校の創立

○湖南代表覃振介紹 安邦、吳光遠、楊希震、蔣玉清、梁巧訓、陳純道、劉顯簧^①、焦達悌、梁典訓

○湖南代表羅邁介紹 訶穆、陳選普、陳燠、曾鍊、劉鐸、江恢漢、卿祿潤、曾曦、安大癸

○西藏代表烏勒吉介紹 陳公俠、遇克武、蔣前濟

もちろん、この二一名が受験者のすべてではない。黄埔建軍の嘶を聞いて、紹介状一本を頼りに、ある者は紹介状もなく、あるいは単身で、あるいは同志と語らって、広州にやってきた者が多かった。そこで急遽入試委員が選ばれた。三月二日、入試委員長に蔣介石が指名されたが、不在のため李濟深が委員長をつとめた。委員は王柏齡、鄧演達、彭素民、嚴重、錢大鈞、胡樹森、張家瑞、宋榮昌、簡作楨の九人であった。受験者の応募資格は高等小学校卒業以上であったのに、その三分の一は中学、専門学校、はては大学生、大学卒の高い学歴をもっていた。そこで国文、数学のほか三角、幾何、代数も入試科目に加えた。⁽⁴³⁾ 国文は戴季陶が、数学は王登雲が出題した。三月二七日、二八日に体格検査を行なった。これは王柏齡の雲南講武堂時代の友人、軍医の宋榮昌が中心となった。筆記試験は三月二九日に広東高等師範（のちの広東大学）で行なわれ、千二百人ほど受験して、のちに述べるように、おそらく一七〇人ほどをとった。成績は大変良く満点をとった者もすくなく、合否の判定に大変苦労したと廖仲愷⁽⁴⁴⁾はいう。他方、上海でも広州とほぼ平行して試験が行なわれた。五〇〇人ほどの受験者の中から、一三〇人をとった。⁽⁴⁴⁾ この学生たちは三月のすえ広州に送られ、軍校の指定する旅館にとめられた。

さて、三月末、広州での試験が終ってみると、廖仲愷は重大な錯誤があったことに気づいた。つまり廖仲愷は広州での試験の前に、上海では一三〇人プラス七〇人、合計二〇〇人をとったらしいという情報を得ていた。もし上海で二〇〇人をとったとするなら、全定員を最大限三二四人プラス五〇人の三七四人前後とみれば、広州では千二百人中か

ら一七〇人ほどしかとれない。こう推定した廖仲愷は広州での初試〔第一次試験〕で一七〇余人をとったのである。

ところが合格者を発表してのち、上海では一三〇人しかとらなかったことを知ったのではあるまいか。二〇〇人説は誤報だったのである。合格者はこの段階で三〇〇人ほど、定員には最大限七〇人が欠ける。こうなれば補考〔追試験〕しかない。こうして日時は不明であるが、四月の上旬ぐらいに補考が行なわれ、五九人を合格とした。今日、国民党党史会に残っている「補考軍官学生姓名」はこのときの受験者の名簿であると思われる。受験者一四三人、合格者五九人という異常に高い合格率は、何はともあれ定員に合わせなければならなかったからであろう。要するに第一次入試の正式合格者は上海で一三〇人プラス α 、広州で二二〇人プラス β となり、この三五〇人プラス $\alpha + \beta$ (α も β も不明)が広州で複試〔二次試験〕を受けた。この試験がいつ行なわれたか明らかではない(恐らく四月中旬か)が、学生たち、特に上海で入試を受けて広州にやってきた学生たちには意外であったようだ。冷欣の回想によれば、学生たちは、たちまち騒ぎだし、ついに旅館で集会をひらき、冷欣と許継慎が議長をつとめたの四項目要求を決議した。①複試の中止。②上海で受験したとき複試の話はなかった。③中止できないとすれば、不合格者に適当な仕事を与えよ。④三人の代表を大本営と軍校準備所に派遣して請願する。冷欣と許継慎、張其雄(許、張は共産黨員、許は一九三〇年富田事件で、張は一九二七年漢口で戦死)の三人は大本営に請願におもむくも、三人ともその厳肅極まりない雰囲気は圧倒され、追いかえされてしまう。かくて複試は広東高等師範で行なわれ四月二十九日に合格発表された。こうして結局三五〇人の合格者と一二〇人の補欠、合計四七〇名が黄埔軍校第一期生入学者となるのである。補欠の枠を大幅に広げたのは、「教育水準がすこぶる高く、革命を志す精神がはなはだ切実であったから、臨時に定員をふやしたのである」と『国軍政工史稿』⁽⁴⁶⁾はのべている。しかし如上のように大きな難関をパスしたにもかかわらず、何ら

の都合でやめた者があり、第一期に入り学業を続けた者は四六二名であった。いま台湾鳳山の軍校に残る第一期生同学通訳表はそのときの名簿であらう。「未完」。⁽⁴⁷⁾

注 (1) 『毛沢東選集』第二卷、北京外文出版社、一九六八年、五七頁。

(2) 同右 以下の引用は二九五～三〇〇頁の間。

(3) 佐々木到一『ある軍人の自伝』勁草書房、一九六七年、一〇三～〇四頁。エピソードは同書九七～一〇〇頁。

(4) 佐々木到一『南方革命勢力の実相と其の批判』大阪屋号書店、一九二七年、以下の引用は二～四頁。

(5) ほぼ同じ時期をあつかった私の論文「黄埔軍校の設立過程とソ連」中哲文学会報(東大)、第六号、一九八一年六月、および日本における唯一の黄埔軍校の専論である竹内実「現代中国への視角―黄埔軍官学校のこと」、思想(岩波)、一九七七年、五、六月号参照。

(6) 黄埔軍校の三つの源泉に つまは、F. F. Liu, *A Military History of Modern China 1924-1949*, Princeton U. P. 1956, pp. 12-14

(7) 国防部総政治部編印『国軍政工史稿』(上)、一一二頁。

(8) ロジェ・カイヨワ『戦争論』秋枝茂夫訳、法政大学出版局、一九七五年、六九、一二六頁。

(9) B・クリック『政治の弁証』前田康博訳、岩波書店、一九六九年、八三頁。

(10) K・マルクス『ルウィ・ボナパルトのブリュメール十八日』第七章、(新潮社版『マルクス・エンゲルス選集』第六卷、一〇四頁)。

(11) ロジェ・カイヨワ、前掲書、一二三～四頁。鯖田豊之『戦争と人間の風土』新潮選書、一九七七年、一三九頁。

(12) ロジェ・カイヨワ、前掲書、一二〇～二一、四三頁。

(13) Frederick Hertz, *Nationality in History and Politics*, Routledge & Kegan Paul LTD, London, 1951, p. 21

(14) E・H・カー『ナショナリズムの発展』大窪愿二訳、みすず書房、一九六一年、一二頁。

(15) F. Hertz, *op. cit.*, p. 150

(16) 中国国民党中央委員会編訂『国父全集』第一冊、一九七三年、二八五頁。この宣言の執筆者は誰かについては、同書

の三〇九～三二〇頁の注①参照。

- (17) Von F. マイネッケ『世界市民主義と国民国家』1 矢田俊隆訳、岩波書店、一九六八年、七頁。
- (18) Hans Kohn, *The Idea of Nationalism*, Mac Millan Paperbacks, N. Y., 1961, pp. 4~7. Hans Kohn, *Nationalism*, D. Van Nostrand company, INC, Princeton, p. 30
- (19) 汪精衛「駁革命以召瓜分說」民報、第六期（一九〇六年七月）。
- (20) 日本国際問題研究所中国部会編『中国共産党史資料集』1、勁草書房、一九七五年、一一九～一二九頁。
- (21) 同右、一四八～一六一頁。
- (22) 同右、一六四～六七頁。
- (23) 同右、二二〇～二二五頁。
- (24) 孫文の革命を単なる軍事行動とみる見方は中国共産党では相当根強くあとまで残っている。孫鐸「国民運動 革命軍和革命宣伝」嚮導、第九期（一九二二年一月八日）、中国共産党三全大会宣言（一九二三年六月）については『中国共産党史資料集』1の二五五～五七頁。マーリンの孫文批判については、Dov Bing, *Sneeviet and the Early Years of the CCP*, in *China Quarterly*, No. 48, 1971, pp. 690-691 をみよ。軍校が創立されたからの批判として、例えば、彭述之「我們為什麼反对国民党之軍事行動」嚮導、第八五期（一九二四年一〇月）をみよ。
- (25) 第二期トロッキー全集第一〇巻『革命はいかに武装されたか』藤本和貴夫訳、現代思潮社、一九七〇年、三〇～三二頁。
- (26) 『国民革命中之民団問題』撰述者譚平山、馮菊坡、印行者広州市永漢北路大本営宣伝委員会、一九二三年七月、全一二頁（新書版）。表紙右肩に「全中国国民革命者聯合起来」とある。
- (27) 『国民革命与工人』撰述者馮菊坡、校閲者譚平山、印行者広州市永漢北路大本営宣伝委員会、一九二三年八月、全一六頁の新書版、表紙右肩に「全中国国民革命者聯合起来!」とある。
- (28) 陳独秀「全党同志に告げる書」（一九二九年二月一〇日）、『中国共産党史資料集』2、五三四～三五頁。
- (29) 孫文が一大大会中の一月二四日に「設校建軍案」や準備委員を、二八日に軍校の校址を指定したことは通説になっている（『國父年譜初稿』下）が、『革命文獻』第八輯、「一大大会の「経過簡明表」（総一一五三～五四頁）」には、この重大な

事実の記載がない。理由は不明である。

- (30) 『広東文史資料』第二六輯、広東人民出版社、一九八〇年、三四頁。
- (31) 黄埔軍校の創立時における最も詳細な記録は王柏齡の「黄埔軍校開創之回憶」(一)～(六)「伝記文学」一五卷六期、一六卷三期、一六卷四期、一六卷五期、一六卷六期、一七卷一期)である。以下の記述は多くこれによる。
- (32) 袁守謙・黄杰『黄埔建军』蔣總統対中国及世界之貢獻叢編々纂委員会、一九七一年、二二頁。
- (33) 黄埔建学のころの広東兵工廠については馬超俊の伝記中に詳しい。陳士誠「追懷馬超俊先生」、「中外雜誌」二二卷五期(一九七七年一月)、任治沅『中央評議委員馬超俊先生簡史』および『陸海軍大元帥大本營公報』黄季陸主編中華民国史料叢編、一九六九年、第三冊の一五二六頁、民国一二年九月二〇日大元帥訓令なども参照。
- (34) 黄季陸「黄埔創校建軍的三段史実」黄埔月刊、一九七七年六月。
- (35) 「校長七次訓詞」(一九二四年五月二五日)、黄埔叢書第一集『精神教育』三九頁。
- (36) C. M. Wilbur and Julie L. Y. How, Documents on Communism, Nationalism, and Soviet Advisers in China 1918-1927, Octagon Books, N. Y., 1972, p. 163
- (37) 「軍官学校章程」がいつ起草されたか不明であるが、その一部分は「国民党周刊」第九期(一九二四年二月二四日)に載る。「陸軍々官学校考選学生簡章」は一九二四年二月二〇日に成立し、全文が「国民党周刊」第一〇期(一九二四年三月二日)に載る。
- (38) 「軍官学校学生来粵川資案」は一九二四年二月六日の中央党部第三次会議にかけられ、二月九日(中央党部第四次會議)にはその修正案が通っている。それが「軍官学校学生来粵旅費修正案」と、現行のものである。
- (39) Vera Akinova, Two Years in Revolutionary China 1925-1927, tr. by S. I. Levine, Harvard East Asian Monographs, 1971, p. 161
- (40) 以下の廖仲愷の電報は、『廖仲愷集』北京中華書局、一九六三年、一二五～八頁。
- (41) 廖の介石あての電文(一九二四年三月三〇日)を見よ。同右、一三二頁。
- (42) この名冊は中国々民党々史会所蔵、毛筆の原件で、判読不能の文字(○印)もあり、誤読があるかも知れない。
- (43) 広州における初試の状況は、王柏齡前掲回想録、廖仲愷の前掲諸電文をみよ。

- (44) 上海と広州の初試、広州の補考、復試についてはまだ不明な点がある。私の前稿（本稿の注(5)をみよ）では上海初試で二〇〇人としたしたが、本稿のように一三〇人〔前後〕とすべきである。訂正しておく。
- (45) 冷欣「黄埔生活追憶—自由談、一五卷第三期（一九六四年二月）
- (46) 『國軍政工史稿』（上）四五頁。
- (47) 以下では、「黄埔血史」、「革命軍」、黄埔一期生の回想録などを使用して、彼らがなぜ、どのようにして黄埔軍校に投じたかを具体的にたどる計画であったが、時間ぎれで断念せざるを得なかった。